

報告 3 : 羽根次郎 (明治大学)

「一带一路」の系譜——ポスト冷戦時代における周縁の脱周縁化について

「一带一路」構想は、2014年11月に習近平が打ち出した。ユーラシア大のロジスティクス再編を主内容とするこの構想は、一方ではオバマのリバランス戦略やTPP構想への一種の「回答」として地政学的に読み解かれることが多い。地政学への関心の高まりは中国でも同様であり、たとえば東・南両シナ海での緊張激化によって焦点化したシーレーン確保の問題を、「海権」(シー・パワー)の概念で説明する論文をよく見かける。

雲南－ミャンマー間、新疆－パキスタン間の関係強化についても同様に、エネルギー安全保障の側面から地政学的に説明されることが多く、その延長線上に新疆－中央アジア間、新疆・東北部－ロシア間のパイプラインについても語られている。つまり、資金力と余剰資本を持つようになった中国の独自の世界戦略として地政学的に議論するケースが一般的とみてよいだろう。

とはいえ、中国側でのインド洋や中央アジアへの関心の原因が昨今の「大国化」のみに止まらないのは、日中戦争期の援蒋ルート<sup>1</sup>の例にも示唆されており、それは『史記』「西南夷列伝」にも遡行可能なものであろう。中央アジアについても同様であり、『史記』まで遡行せずとも、海防論－塞防論の論争や新疆－カザフ間の中ソ鉄道<sup>2</sup>の例に一種の象徴を見出すこともできる。つまり、冷戦期特有のイデオロギー対立によって分断され不可視化されていた中国の非東アジア世界との関係がポスト冷戦期に入り、イデオロギー・ポリティクスが弛緩することで可視化されるようになったと考えられる。

この「可視化」を促進したのが、「接続性」や「標準化」が問われるグローバル分業体制における国境の溶解である。貧困と同義的だったかつての周縁は、隣国の周縁と接続することで一種の特異な優位性を得るようになっていく。近年の地政学的関心の高まりは、冷戦に先立つトランス・ナショナルな関係性の系譜が、周縁の脱周縁化というグローバルな時代的條件を活性剤として出現したものと解釈しうるのではなかろうか。本発表では、以上の問題提起を主旨として、中国を「中国」のみに回収せずに世界大に考察しうる視座を検討してみたい。